

●教材

日本三大花火の一つ、長岡花火ではフェニックスなど、ごうかな花火が数多く上がります。そんな中、毎年上げられる少し変わった花火があります。白銀一色の白菊です。花火大会最初にゆつくりと間をあけて3発。花火職人嘉瀬誠次さんの深い願いがこめられた花火です。

1922年、長岡市で花火職人の三代目として生まれた誠次さん。やがて仕事を手伝うようになります。ところが1937年、日本と中国の戦争が始まり、花火も中止になります。1941年にはアメリカとの太平洋戦争も始まり、多くの兵が戦死しました。誠次さんも20才の時、北海道の千島列島へ向かい、はげしい空しゅうを受けました。そして1945年ついに日本は無条件降ふく。誠次さんた



ちは、ほりよとしてソ連（今のロシア）軍の船で、シベリアの収容所に連行されました。待っていたのは、冬はマイナス20〜30度の中で行う線路しきや、森の木を切るきびしい作業でした。収容所には50〜100人がねる部屋にストーブが一つ。ふとんも毛布もないわらのベッド。上着だけでした。わずかな食事で毎日が空腹との戦い。野草やネズミなど何でも食べましたが、きびしい生活で6万人以上が命を失ったそうです。そんな中、水やパンをくれた近所の子どもたちや老人の親切が、今でも忘れられないそうです。

幸い、誠次さんは3年で日本に帰国できました。そして27歳で花火師として本格的に仕事を開始。長岡花火に力をつくし、糸やなぎ、ひまわり、赤入り白銀菊…と新しい花火を次々に生み出しました。今では全国に広まった、橋から滝のように流れ落ちるナイアガラを作ったのも誠次さんです。嘉瀬誠次さんの名声は、日本国内だけでなく海外でも有名になり、1984年ロサンゼルスオリンピックでは、3千発の花火を打ち上げました。その後、海外での打ち上げは、7か国26回にもおよびま



↑三尺玉花火(嘉瀬さん打ち上げ)の写真入り直筆色紙



↑中越地震からの復興を祈願し、毎年打ち上げられる花火「フェニックス」

した。

そんな誠次さんですが、1989年、あるイベントで、「嘉瀬さん自身が花火を上げてみたい国はどこですか。」と質問されました。そして考えた末、誠次さんは答えました。「シベリアで上げたい。私はシベリアでほりよになりました。私は生きて帰ってこれたけど、帰って来れなかった仲間のためですが、天国で幸せになるように花火を上げたい。」

シベリアでの花火打ち上げには、多くの人が協力しました。誠次さんはなやみました。その末に考えたのが白菊だったのです。仏だんに白い菊をそなえるような気持ちで、花火を上げたいと思ったのです。花火大会では人々から大かんと声が上がって、クライマックスで白菊がゆっくりと打ち上げられました。40数年前、にくみ合った日本とソ連の人々の心が、友好のきずなで結ばれたしゅん間でした。

その後しばらく、白菊は打ち上げることはありませんでした。気づけば誠次さんも80才。そんなとき、長岡まつり実行委員から、戦後の長岡花火の原点にもどって、なくなった方々のために花火を上げたいと相談がありました。長岡は、ぼしん戦争や太平洋戦争の空しゅうで町を焼かれ、多くの人が命を落としています。2002年、こうして12年ぶりに白菊が打ち上げられました。以来、長岡花火では、平和へのいのりをこめたシンボルとなっています。また、2012年からは日米の戦争が始まったハワイでも上げられ、日米の友好、心のかげ橋となっています。

誠次さんは、言います。

「火薬を使って人を殺すのが戦争。人を楽しませるのは花火しかないでしょ。いろんな赤も緑も：ドン、パチン、プス、みんな、自由に作ります。ほこりのもてる仕事です。」誠次さんが引退した今も、白菊は毎年打ち上げられています。夏の夜、世界の平和や友好、人々の幸せを願って上げられた花火が、みなさんの町でも、美しく咲いているはずです。



嘉瀬誠次さん





平和

の花



花の平和を
つとめる
2014年10月





